
忌み子と魔王の子供たち

安藤 夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忌み子と魔王の子供たち

【Nコード】

N3932BA

【作者名】

安藤 夏

【あらすじ】

剣と魔法の物語。『忌み子』と呼ばれる少年が魔王の子供たちの教育係になりました。

『忌み子』自体は本文で明らかになります。かなり残酷な描写あります。また人の暗い部分も出てくると思います。

私自体文章を初めて書いたので見苦しいところもありますがよろしく願います。

1話（前書き）

私自身初めての試みですので、矛盾点等ありましたら教えてくだ
さい。

また、私は「生活」>「仕事（生活の為の）」>「趣味」と言う優
先順位なので、1週間に1回更新できるかできないか・・かなりの
るまなのでご了承ください。

1話

「力が欲しいか？」

父が彼に声をかけている。

彼に興味を持ったのは私の方が先だったが、今ようやく彼から見える位置に立つことができた。

彼等を見かけたのは10日位前、たまたま行き先が同じだったが、父と私が彼等に見られることを避けたかった為、父が彼等の後をゆっくりと進むしかなかった。

一応、父は有名人であり、たまに命を狙われることを知っていたので、できるだけ人との関わりを避けて生きているのを知っているから仕方がない。

私が彼に興味を持ったのは、単純に生きる意志を持っていた目だった。

初めて彼等を見かけたときは、私は彼に気が付かなかった。

2日に一回彼等を遠くから眺めているうちに、彼だけが私の心に

残っていった。

決定的だったのが4日前、彼のグループが初めの頃の半分になった夜に、彼が川で泳いでいる姿を見たときだった。

薄明かりの中、白い肌に長く艶のある黒い髪、水面から体を浮かび上げるたびに私は彼を美しい生き物と思った。

私はこれまで出会った中で一番綺麗な髪は、弟のものだと思っていた。

弟の髪は、太陽に照らされると金糸のように輝いていて、少し茶色が混ざった私にとって嫉妬よりも美しさにため息が出る。

それでも、夜だからか、それとも夜だからこそか、

彼の黒く光沢のある髪は私たちとは別の生き物だと思えるほど美しかった。

今は、倒れて体のあちこちから血を流し、髪も土埃にまみれて見る影もないが、

それ以上に私を興奮させたのは、彼の瞳だった。

「力が欲しいのかと聞いているのだから・・・」

父が、もう一度問いかけているが、私は彼が動けない状態だとわかっている。

おそらく、意識はもつないだろう・・・

彼がゆっくりと目を開けたときは、私は驚き以上に心が震えた。

「・・・俺は・・・生き残る・・・。あいつら・みたいな、人になくなるのはゴメンだ・・・」

目が生きている・・・。

体は動かないはずの怪我を負っているはずなのに、そんなことは関係ない事だと言うように・・・

私は、初めてこの人の様に『なりたい』と思った。

2話 助けたのは魔王様（前書き）

連続で投稿。

短いですがよろしく願いします。

2話 助けたのは魔王様

目を開けるのも億劫だった。

目を閉じているからこそ体の状態がよくわかる。

今は全身に痛みらしい痛みこそ無いが、疲労感がすさまじい。

実際に体を動かすとするとおそらくかなりの痛みが出るだろう。

右腕をゆっくりと顔に持っていくと関節の痛みがあるがそこまでひどくない。

「やあ、意識は戻ったようだね。辛いならそのまま眠りなさい」

男の人の声がする。

だが、こっちに来てから言われたことにしたがってろくな事が無い。

それに、おそらく助けてもらったであろう相手にも失礼だし。意地でも体を起こすことにする。

動いたたびに皮膚が引っ張られる感覚がぎこちないが、ゆっくりと体を起こし壁に寄りかかる。

「いや、その前に助けに来てあっりがとうございます」

目を開けると窓から光が入っている。

部屋の奥まで照らさないことを思うと、まだ昼間だろう。そのわりには光が弱い……

「すみませんが。俺はどれくらい眠っていましたか？ 一緒にいたやつらは？」

光になれてようやくだが、助けてもらったと思われる男姿が見えるようになってくる。

年齢は……解らない。目じりにしわがあるがはっきり言ってこちらの人の年齢なんか見た目とギャップがありすぎる。

顔つきは温和そうだが、目を見ると俺をモルモットのように観察しているようだ。あまりいい人間ではないな……

「君が眠っていたのは1日だけだ。それと、君の仲間は手遅れだったよ」

ああ、やっぱりろくでもない。人が死んでいるのに笑顔で答える。

そんなこと思っていると、わざとらしく手をポンッと叩くと、

「自己紹介がまだだったね。僕はこの森の住人で錬金術を行って

いるサーゼスと名乗っているものだ。

もっとも、周りの人間からは単に魔王と呼ばれているがね」

クソッタレ・・・

3話 説明1（前書き）

しばらく説明が続きます。

3話 説明1

まさか、俺を助けた相手が魔王とは……

「で、なぜに俺だけを生かしておいた？」

当たり前前の俺を事だが生かしておいて魔王にメリットが無い。

「君は、あの聖杯周辺で唯一人間でいたからね。興味を持った。

おっと、その前に僕も名乗ったのだから君の名前は？」

「……ある……」

俺は搾り出すように言葉を口にした。

当たり前前だ、こちらに来てから自分の名前が口にできない。文字にも書けない。

「アル君か……なかなか君は興味深いよ」

勝手に名前を間違えるなど言いたいが、魔王が続けて説明しようとしているので、

話の腰を折らないように黙ることにする。

「アル君が倒れたところは、自然にできた魔力の渦のようなところだ。一応私は聖杯と呼んでいる

その中で君だけは人の形を保っていたままだったからね。ほら、アル君の仲間が次々と体を変化していかなかったかい？」

仲間なんていう間柄じゃないが、確かに人間としておかしくなっていた。

力自慢で魔物の攻撃を受け止めていた奴は、盾が壊れた後は体の一部から鱗が生まれた。

弓を扱っていた奴は瞳の色が変化していた。

剣を使っていたものは手と剣が一体化していった・・・

他にも気配を消すのが上手かったやつがいたが、俺以外の奴は彼を視認することができなくなった・・・

「確かにおかしなことばかりだ。どうしてあんなったかは魔王さんがわかってるんだな」

確認のために聞いてきたので、当然理由はわかっているはずだ。

「もちろん、魔力の渦。僕は聖杯と呼んでいるが、そこでは自分の欲望の一部を手に入れられる

君も見ただろうが、傑作だったのは魔物の攻撃に耐えるために自分から魔物と化す者もいたしね」

ククク、と口の中で笑っている。

「その中で、アル君。君だけが死にもしない。それどころか人の姿を保ったままというのが実に興味深いよ。

私の娘さえ姿が変わったのにな・・・」

4話 説明2（前書き）

読みやすいようにしていますが、失敗したらすみません。

4話 説明2

「娘のことで思い出したのだが、アル君、君の体は大丈夫なのかい？」

僕は治療魔法が得意であって回復魔法はあまり得意でないが、ちよつと診察させてもらうよ」

なんだ？ 治癒と回復？ 同じ怪我を治すなら区別しなくてもいいのに。

「ふむ、どうやら魔法に関しては完全に素人のようだね。ああ、別に脱がなくていいよ」

シャツを脱ぐときに肩甲骨あたりに痛みが走ったが、彼は、俺の心臓に手を当てたまま目を閉じた。

「全身を見るのでちよつと時間がかかるので、魔法に関して聞きたいことがあるならどうぞ」

こつちに来てから、ほとんどの時間を生き残るために費やしていたので、願っても無い情報だった。

彼の手から文字が浮かび上がると、俺の胸の中に吸い込まれていくのを確認すると質問を始める。

「まず1つ、魔法は誰にでも仕えるのか？」

2つ、魔法を使うたびに文字出るのは何度か見たことがあるが、どういう意味があるのか？

3つ、他の人は文字だけでなく言葉を使っていたが、どんな意

味があるのか？

4つ、同じ文字でも威力がまったく違うのを見たことがあるが、これは個人の資質なのか。また、効果時間は？

5つ、魔法の種類、さっきの治癒魔法と回復魔法。ほとんど同じ意味について」

「すごいね。まさに重要な要点ばかりだ。もし僕が魔法に関しての書を書こうとしたら、その質問を載せてもいいかい？

すべてに答えられるほど、君の体が本調子で無いと思うので簡単に答えさせてもらおうよ」

彼の答えは本当に簡単だった。

魔法は誰にでも仕えるのか？

『理論上誰でも使える』

魔法と文字のの関係は？

『魔法文字による魔法の発動、無く

てならないもの』

魔法と言葉の関係は？

『自分のイメージを魔法に変えるた

めの補助。

火を熾すだけなら言葉は要らない、

文字だけで十分』

個人の資質と効果時間は？

『資質に関してはイメージと魔力、

時間は個人の魔力消費しだい』

治癒魔法と回復魔法の違いは？

『治癒は魔法士としての能力しだい

で変わり、

回復は受けた側の

回復能力の増加』

「まあ、こんなもんだね。後は、体のために軽く食べて眠りなさい」

テーブルの上にある緑色のスープ（おそらく豆類のスープ）と硬そうなパンを渡される。

スープをあつためたときにパンも温めてくれたのだろう。パンをスープに浸しながら少しずつ口に入れていく。

はつきり言って不味が食えないものでもない。

胃腸をびっくりさせないようにゆっくりと時間をかけて口に入れていたところで、彼が診察用の魔法が結果を表したようだ。

「ねえ、アル君。君は何で生きてるの？」

とても不思議そうに・・・俺には意味が解らない・・・

5 話 説明3（前書き）

説明が長くて申し訳ない。

5話 説明3

「ねえ、アル君。君は何で生きてるの？」

とても不思議そうに・・・俺には意味が解らない・・・

「生きたいと思ったから？」

おそらくこんなことを聞いているのではない。と思っているが、魔王の意図が読めない。

「体中にあつた使役の枷は解除したが魔力、いや、根本的な存在の力がまったく回復していない」

・・・何が言いたいのかさっぱり解らない。

俺の顔色にすぐに思いついたのであろう。

相手はかなり頭の回転が速いのでとぼける振りをすることにしようとする・・・

「簡単に言うと魔力は自然回復、存在の力は・・・生命力？」

正確に言うなら魔本と同じこの世界で言うところの魔法と同じく、この世界を書き換えるものだ。

アル君、簡単に言うと君は魔法と同じ、この世界に認めながらも常に存在を消去され続けられる」

何が言いたいのか解ったが、あえて言わないでおく。

「アル君、君は『忌み子』だね」

・・・、はつきり断言してきた。

今までの経験上ここまでではつきりとした名詞はかけられなかったが、おそらく間違いないだろう。

この世界をよく知っている人にあつたことは無いのだから・・・

「・・・『忌み子』とは？」

「この世界の生まれでないことだね。

別の呼び方で『落ち子』とも呼ばれる。

すごく簡単な言葉で言うとは別世界の生まれっていうことだよ」

当たり前だ。『別世界』とはつきり言われたことで、おそらく知識と経験おそらく両方とも兼ね備えているだろう、

「ああ、実は本名すら言葉にできない。あんたの言う使役の枷とやらで魔法も使えない。

この世界に落ちてきて3年になるが、戦闘奴隷として今まで生きてきた」

俺が15の時に落ちてきて、3日目には闘技場らしきもので初めて人を殺した。

武器も無し、身にまとっているのはボロ布一枚と拳を守るための血で汚れた布だけだった。

1ヶ月ほどで動物と殺し合い。半年で魔物と呼ばれる生き物と戦った。

1年後には傭兵らしき人物に買われ、囿役として多くの『生き物』と戦っていた。

俺が生き残れたのは戦闘能力ではなくて臆病だったからだ。

見たこともない『生き物』相手にどう対処するか慎重に対応していたから、何とか生き残れた・・・

「うん、アル君。君は運がいい」

6話 説明4（前書き）

これにて説明終了です。

1話目の人、いまだ名前すら出てきてません。
この話大丈夫なんでしょうか？

6話 説明4

「うん、アル君。君は運がいい」

俺は魔王の言葉に、耳を疑った。

あんな経験したくはないし、『人』として扱われなかったのに・

「僕は、錬金術師と名乗っているが、実際には君と同じ『忌み子』から教わった言葉だ。

彼は、この世界に魔法があることを知ると早速魔法を使った。

魔法を教えたのが私だからね。

あつという間だったよ、彼が消えてしまったのは・・・」

古い記憶を探るような顔つきになると、『忌み子』についてゆっくりと説明してくれた。

曰く、普通に生活する事はできない。

曰く、他者の命を奪うことで自分の存在を保持し続ける。

曰く、子を作った場合は、この世界で生まれた子供の『親』として、

この世界から拒絶が無くなる。

曰く、魔法を使った場合は魔力だけでなく存在の力を消費するために命を落とす。

曰く、この世界とは別の知識を持っている為に、知識としては欲しいが、

2番目の枷がある為、すぐにこの世界から消えてしまうらしい。

「戦闘奴隷として生きてきたのは運がいい。普通ならばあつとい

う間にこの世界から消えてしまっているよ」

事情を聞いて、初めて運がいいと思った。

戦闘に駆り出されたから命と引き換えに生きてこられた。と素直に喜べないがな・・・

「それでは、改めて君が『忌み子』と知ったところで、契約を結ばないか？」

何を言っている？ 魔王の説明が本当のことならほとんど魔王にメリットは無い。

「簡単なことだよ。僕には2人の子供がいる。子供らの教育係になつて欲しい。

僕は君が知りたい情報と、生き残れる為の環境を整えよう。

簡単に言ってしまうと、君が子守。僕が、君の生きる為に殺しても問題ないものを用意する」

今まで生き残るために生きてきたのが、自分だった。

戦闘奴隷として他人の意のままに生かされることに比べれば問題ないが、相手の言うがままに生きるつもりは無い。

「では、この世界の常識と、魔方陣？ のようなもの。それと、俺専用の作業場を準備してくれ」

「それくらいはかまわないよ。常識と陣の基礎は転写してあげよう。

転写は元々戦場の伝令用に作られたもだったが、私が改良したものだよ。

しかし、使えないと解っていても陣のことを知りたがるのは何故だい？」

「何回か魔法を使う奴と戦ったことがあるが、呪文？ らしきものと効果が違っていたが、魔方陣は似たようなものだった。」

魔方陣の意味が解れば対応はだいぶ楽になる」

「なるほど、確かにそういう考え方もあるね。」

最低限の常識と陣の転写で、1日位は頭痛がするからね」

簡単に言ってるが、一応ストップさせておく。

「常識は欲しいが、『陣』だけ？ 魔方陣の構造と意味だけでいい」

魔王が軽く首をかしげている。

こいつは自分の言ったことの意味を解っているのだろうか？

「あんたは『転写』を自分が改良したものだって言ったろ。」

って事はその『陣』って奴は使う人間によって変わるって事だ。丸暗記させられるより意味が解ったほうが対処しやすい」

「うん。確かにそのの方が頭に負担がかからないね。」

どうせ、今の君なら後2、3日ぐらいは体を休めなければろくに動けないから、その条件で転写を始めるよ」

魔王は俺の額に手を当てると、魔王と呼ばれるのが不思議なくらいやさしげに笑った。

「おやすみ。『忌み子』。僕の事はサーゼスと呼んで欲しいな。」

子供たちの面倒をお願いするよ」

魔王、いや。サーゼスの言葉が終わらないうちに彼の手から光が溢れて脳の中を情報が駆け巡っていく。

頭痛なんてもんじゃない。俺はあっという間に意識を失った・

7話 サーゼスの独り言

はじめは娘が興味を持った人間だったから保護したが……

思った以上に面白い拾い物をした。

まさか『忌み子』とは……

それなりに長い時間生きてはいたが、実際に見たのは彼で3人目だった。

『忌み子』と初めてであったのはかなり昔、錬金術師と名乗っていた愚か者だ。

鉄を金に変えると言っていたが発想は面白かったが、妄想の域を出ないようだったのだからために魔法の知識を与えると嬉々として魔法を使って消えていった。

僕には愚か者としか思い出せないが、彼の考え方、着目は当時の僕には無かった。

それ以来、僕は常に常識を疑うことにして『錬金術師』と名乗っている。

まあ、常識を疑うことによって様々な陣を生み出したことには感謝しないといけないがね。

そのおかげで『魔法使いの王』とやらのありがたくない別名を受

けた・・

2人目は最近会っていないが、正直言つてとんでもない化け物だよ。

今回拾った彼と同じ黒髪黒瞳だったが、知識量が半端じゃない。もつとも身体能力もとんでもなかったが、まさか身体強化無しであれほどの魔物と渡り合える人物はいない。

他にも彼が使っている武器や防具は自分自身で鍛え上げた物だったことだ。

それ以外にも薬士と料理人としても文句が無い。
彼の言葉に直すと「医食同源」と言うから驚きだ。

もつとも恐ろしいことは、あれほどの知識量を持っているにもかかわらず、
表舞台に名前が残らないように意図的に情報を流していること。
まったく彼が所属していた『影』と言う存在はどうやったたらあんな化け物を育て上げられるのか・・・

今回拾った彼は僕の子供たちにどんな影響を与えるのか楽しみだ。

戦い方はまだまだ拙いが、困役として十分すぎる判断力を見せていたのが、印象に残っている。

彼が使っていた防具は統一性が無かったが、彼の戦い方を観れば上手く組み合わせた装備だった。

2人目ほどではないが、相当な知恵者であろう。
子供たちの教育係としては十分すぎる。

子供たちが成人する前に僕の寿命が尽きるだろうが、『忌み子』
である彼に任せれば問題ないだろう・・・

後は彼が少しでも長くこの世界から消えないように研究をしなければならぬ。

彼が予想通りの人物なら、研究途中で僕がいなくなっても問題ないだろうし・・・

7話 サーゼスの独り言（後書き）

これにてストックが無くなりました。

切りのいいところまでまとめて投稿しました。

次回から数年後の話になります。

主人公は本来明るい性格ですが、こちらに来てから警戒心が高いです。

当然ながら次は数年後の世界なので口調等かわります。

8話 旅立ちのとき（前書き）

やっと1話の人たちの名前が出ました。

書いては修正。次の話を書いては前の話と合わないので修正。

そのうち上手くなるのかな。

8話 旅立ちのとき

「おにいちゃん！ 早く町へ行こーよー」

「ルー・靴紐を縛っているときに飛び掛るんじゃない。って何度言ったらわかるんじゃない」

長い黒髪の青年の背中に張り付いたルーと呼ばれた少年の頭を左手で鷲？みすると、そのまま引き剥がして目線を合わせる。

金髪に紅い瞳の少年は、身長さがあるので足をぶらぶらしているが、ニコニコ笑っている。

「おにいちゃん。頭が割れるー。こつこつのをじどつぎゃくた
いって言うんだよー」

表情と台詞が一致しない。

「ルー。旅の準備は終わったの？ 早くしないと置いて行くわよ。
今日中に森を抜けて荷馬車のところまで行くんだから」

青年の小屋の前で黒髪黒瞳の少女が立っている。

「マリア、母屋の片付けは終わっているんだな？」

いまだ少年を左手でぶら下げたまま、青年はマリアと呼ばれた少女のそばに近づいていく。

「はい、アル兄様。母屋に火を放つてもよろしいのですか？」

「リアねーちゃん。ボク、現在進行中でぎゃくたいをうけてる」
ぶら下がったまま足だけの力で、プラプラ揺れている姿はどう見ても遊んでいるようにしか見れない。

「ああ、重要な物は俺の地下倉庫に移したし、崩せばそう簡単に発掘されないだろうしな」

5年前に完成した作業場の1階は、ほとんどが切り出した岩と土で出来ていて、増設した2階は寝室のみの簡単な作りだ。

「お父様が亡くなって2年。やっと旅の準備が整いました」

母屋に近づくと無数の魔法陣を作り次々と火を放っている。

「マリア・・・その言葉と行動がいまいち合っていないぞ・・・」

俺がここに来て4年後サーゼスは病死した。そのときに預かったものは手紙と資料。

資料には『忌み子』に関するもの。俺が生き続けるためのものと魔力を周囲から吸収すれば魔法が使えること。

特に幻想種と呼ばれる物を使えばかなり持つらしい。

一応、『忌み子』での突然の消失用に保険は打ってあるが、机上の空論。実践するには怖すぎる。

魔法に関しては実験済み。

幻想種とは、生態系とまったく違う生き物らしい。まあ、予想通り代表的な生き物は「ドラゴン」「竜」

他にも聖獣、「ユニコーン」「ペガサス」「麒麟」「天狗」「天狐」……

魔力の渦、サーゼスが言うには『聖杯』の力を大きく受けたものや、俺と同じくこの世界を知った『忌み子』が無意識に想像したものらしい。

……なんと言うか、意外と『忌み子』がいるんじゃないか？

手紙に書いてあったのは、この森を抜けて、フィリアと言う都市を最初に目指すこと。

どうやら俺の先輩『忌み子』住んでいた町だと。

最低限の常識しか知らない俺はとりあえずそこで実践的な常識を覚えたほうがいいらしい。

出来ればマリアの旅の友となって欲しいとのこと。

手紙を受け取ってから俺は、2年間使い勝手のよい陣の製作、魔力の効率的な陣の改造、自分たち用の武器を作ってやっと旅に出られる。

もっとも陣の改造で一番の恩恵を受けたのは、サーゼスの娘のマリア。俺はなぜかリアとしか呼ばせてくれないが、簡単な魔法なら魔力の消費がかなり抑えられるとのこと。

俺が、元居た世界では技術大国と呼ばれていたし、俺の祖父ちゃんや親父が技術者だった為に俺も常に効率化をを考えるようになった。

「鬼いちゃん。さすがに頭が痛いよー」

微妙なニュアンスで語りかけてきた少年ルーを頭皮を擦るように地面にたたきつけると、

「ルー。お前は、俺の作業場の一階を叩き壊して旅に出るぞ」

頭皮を擦ったために地味に痛がっているサーゼスの息子に指示を出すと楽しそうに俺の作業場を素手で壊しに行った。

旅に出るのに2年かかったのはルーの力の制御が追いつかなかったのが原因だ。

とある事情により人外の力を持ったためにルーはおそらく一番強いだろう。

さて、旅に出ますか。

8話 旅立ちのとき（後書き）

アル君の口調がやっとまともになりました。

変なところがあったら教えてください。

また、閑話集を「忌み子の子育て術」と言う名で投稿します。

これは偉人の名言よりも私の祖父、祖母、両親、友人等の言葉をこの物語に合わせていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3932ba/>

忌み子と魔王の子供たち

2012年1月14日10時48分発行